

これも木造であった。20才前後の男女で、ろく膜や結核をわずらい、病死するものが大変多い時代であった。こんなことから、高等学校の学生の死亡率も高かったが、病没者に対して遺族や友人が記念文庫を図書館に寄贈していた。概して哲学書や文学書から成るものであり、裏表紙に故人の写真がのっていた。

そういう文庫の中で文学書めいたものを読んだ。津田（左右吉）先生の『文学にあらわれたる国民思想の研究』の各編を耽読したのもここであった。これは国史の先生が参考用に出して下さっていた書物の中にあった。

京都大学に入ったとき、何回か京大の図書館に入った。これも焼ける前の木造であったが、書物を買うくせが出来ていたためか、あまり厄介にならなかった。

当時丸善の京都支店が三条にあった。梶井基次郎の『檸檬（れもん）』に書いてある通りである。京大の図書館も丸善も木造で、しかもどちらも天井が低かったためか、いつも連れ立って二つが思い出されるが、図書館よりも丸善に行くほうが多かった。

最近、新刊書、とくに普及書は、山のように多い。たしかに文運の隆盛を慶賀したい。昭和のはじめの、桑原さんが指摘された大変化ののちも、今にくらべると新刊書は少なかった。専門書の出版はとくにすくなかった。つまり、私たちが育ったのは、今にくらべて書物のはるかに少ない時代だったわけだが、そのことがそれほど不幸には感じられない。いろいろ事情はあろうが、当時書物に対して大きな尊敬が払われていたこともその一つの理由のようである。
(経済研究所教授)

一言・ふたこと

図書館の仕事というものは、元来地味で表面に出ず、それでいて完全性、もうら性が要求されるものである。しかし、最近そのことが忘れられている面もあるようである。例えば現在の目録は利用者の立場から見れば、必ずしも使いやすいとは言えない。分類も学問の進展に応じていないところもある。書庫も蔵書の増加とともに狭くなりつつある。また、欠本が意外に多いことも気にかかる。再購入もされず、手作りの表に控えられているだけである。排列の誤りは、うっかりしていただければ済まない。増大する雑誌、紀要類の製本の基準もその時の予算の具合で決ることがある。昨年の内部改装も何年あとまで考えられているのであろうか。要するに、

図 書 館 に 願 う

— 仕 事 と 人 間 —

部局図書館を含めて大学図書館のあり方の根本的理念、構想が、

未だ十分に確立されていのではないだろうか。さらに細かく言えば、本の正誤表の問題がある。これは、訂正されず、そのまま見開きにセロ・テープではられているだけなのである。痛んだ本の修理も一時の間に合せに過ぎない。いつからか、従来の風格のある蔵書印が、簡便で安っぽいものに取って代わった。玄関前に雑然と置かれた自転車や期限の過ぎた掲示物は、また一体何を語るのか。図書館こそ時流に流されず、過去の保存とともに、絶えず未来への展望を究めておかねばならないし、職員のかたも御苦労だが労働者ならぬ人間としての自覚を持っていただきたいと思うのである。

(文学部大学院学生 若井勲夫)